

新小学5年生の保護者に向けて

自主性を生かしたスケジュール作り

高学年への入り口に立ったこの時期は、生活のリズムを見直すのにいい機会です。徐々に芽生え始める自主性を尊重し、上手に刺激しながら、子どもと一緒に学習スケジュールを立ててみるといいでしょう。計画倒れで終わらないスケジュール作りのポイントやヒントを整理してみます。

●まずは目的・目標を整理

これから迎える5年生という学年は、人格が形成されていく初期段階です。自分がどうしたいのか、どんな大人になりたいのかといった夢や目標が次第に明確になっていきます。

自分自身のやりたいこと（目的）ができると、具体的な目標が立ち、行動につながるものです。

まずは子どもと一緒に目的・目標を整理して、高学年に向けた動機付けの機会としてください。

当然ながら、目的・目標は変化しても何の問題もありません。試行錯誤の中で様々な分野・方面に興味・関心が向くことが将来に向けての無形の財産になっていくことでしょう。

●つまずき始めを見逃さない

4・5年生にかけては学習内容が難しくなり、重要な単元が多くなります。算数では、たし算・ひき算の筆算、分数のたし算・ひき算、小数など計算力の基礎となる単元や、面積・割合などの新しい概念も登場します。

この時期のちょっとしたつまずきは、その後の学習に大きく影響を及ぼすのです。よく「得意科目、不得意科目は4・5年生でつくられる」といわれるのも、なるほどうなずけます。苦手なものはつい後回しになってしまいがちです。ときどき子どもと一緒に理解度を確認し、早めに苦手教科の対策を行いましょう。

●スケジュールの上手な作り方

学校や塾の授業時間も増える高学年は、いかに効率よく時間を使うかが大切。しかし、子どもは段取りが苦手です。学習目標達成までのスケジュールを子どもと一緒に考えてあげましょう。

例えば学校の宿題をいつやるのかについて、子どもとルールを決めておくといいでしょう。

その際に大切なのは、「〇〇をきなさい」といった命令ではなく、「〇〇を先にやって、あとは夕飯後一緒に解いてみよう」といった助言です。子どものやる気をうまく刺激してあげましょう。

●無理なく続けるひと工夫

スケジュールの中には上手に「ごほうび」や気分転換を盛

り込むのも大切です。

学校から帰ってから塾に行く前におやつを出して子どもの気分転換となる演出などしてみてください。

また、あまりがんにがらめにしないことも大切です。

例えば勉強は開始時刻だけを決めておき、終了時刻は子どもにゆだねるのも一案です。

●「量より質」で集中力アップ

勉強は長時間やればよいものではなく、たとえ5分、10分という短い時間でも集中することが大切です。

忙しい課外活動などを続けながら勉強も両立している子どもは、自分のやりたいことに時間を割きたいからこそ集中力が発揮できるものです。

短時間学習の習慣づけには、算数ドリルや漢字練習などが手軽でよいでしょう。使いたい教材を自分で選ばせてみるのも、やる気につながります。漢字も繰り返し練習するより、3回できれいに書く、といった目標を設定して練習するといいいのです。

また、集中力を高めるには勉強だけでなく、好きなことを好きなだけとことんやらせてあげるのも大事。勉強と関係がなさそうなことでも、とにかく夢中になることによって集中力のレベルが高まるのです。

子どもが集中していることをむやみにさえぎらず続けさせてあげるような心のゆとりを保護者が持つことが大切です。

●習い事の効用、塾の活用

習い事には集中力アップなどの効用がありますが、高学年になると、勉強が大変になり、やめる子どもも少しずつ出てきます。しかし、スポーツや音楽などと両立することで生活にメリハリができます。今後の目標につながることであればなおさらです。可能な限りスケジュールに組み込んであげましょう。

また、塾はフル活用するのがおすすめです。ただ授業を受けるだけの場所ではありません。例えば塾の自習室は、家庭と違ってテレビやゲームなどの誘惑もなく、隣で仲間が勉強しているのを見て、自分もやる気になるなどの効果があります。また、わからないときにはすぐ先生に質問できるのも大きな魅力です。

新小学6年生の保護者に向けて

自信とやる気が自立心を育てる

小学校高学年から中学校にかけての時期は、大人になるための基礎づくりをする時期。学歴だけでは太刀打ちできない時代に最も大切な「生きる力」を養うのも、この時期です。生きる力の基本は自立心。そのためには、親が子どもの様子を「よく見る」こと、そして、子どもの話を「よく聴く」ことが大切です。

●マニュアルは通用しない

不確実で何が起きるか予測できない現代社会。マニュアルの通用しないこんな時代に必要なのは自分で気づき、考え、判断する「生きる力」です。しかし、多くの子どもは指示されることに慣れ、自分から動く主体性が育っていないのが現状です。

子どもの主体性を育てるには、家庭のしつけ教育が重要。雑誌やテレビなどで子どもの育て方、親子のかかわり方などの情報が出ると、その内容をそのまま実行しようとするご家庭が少なくないのですが、大切なのは各家庭のスタイルに合わせて、わが家ならどういう子育てができるのかということとをいろいろ試行錯誤して考えることです。

●手を離し、よく見て、よく聴く

個々の家庭に合った子育てのあり方を探り、子どもの主体性を育てるためには、まず子どもをよく観察し、耳を傾け、子どもを受け止めることです。手をかける割合は、成長段階に応じてだんだん減らしていく必要もあります。つまり、「目を離すな、手を離せ」ということでしょう。

子どもたちは、反発と甘えを繰り返しながら成長していきます。反発しているときには離れてそっとしておき、逆に甘えてくるときには受け止めて思いきりかわいがる。そして、じっくり子どもの状態を観察し、話を聴いてあげてください。「聴く」というのは、「今日は何をしたの」「宿題はやったの」と詰問することではなく、子どもの言うことに耳を傾けることです。勉強の意欲を妨げるのは、やろうと思っている矢先に「勉強しなさい」と言われることなのです。例えば、何か目標を立てるにしても、親が最初から設定してしまうのではなく、まずは子ども自身の考えを聞いてみましょう。「あなたならどうする？」と子どもの考えを聞いてあげる、指示のない指示を心がけるとよいでしょう。

●生活体験の差が自立心の差

子どもの自立には、生活体験の差が大きな影響を及ぼします。自分のことを自分でやってきた子どもは、自己管理や時間の使い方が上手。想定外のできごとにも対応でき、自分らしく生活していきます。

保護者が指示をしたり、代わりにやってあげたりするので

はなく、自分のことは自分でするものだという意識を持たせることが大切です。洗濯物はかごに入れる、布団は自分で敷くなど、簡単なことから少しずつ、子ども自身にさせていきましょう。ごみ出し役、朝刊を取ってくる役など、日課として何か一つのことには責任を持たせるのもよいでしょう。

学校の課外活動やそのほかの体験活動なども有効です。

キャンプなどの集団活動をきっかけに自立心が芽生えることもあります。なるべく社会体験の機会をつくってみてください。

●自立心は小さな自信から

保護者は子どもについて苦手なことを指摘するような働きかけをしがちで、得意なことを見つけて伸ばす発言は怠りがちです。しかし、これでは子どもが萎縮してしまい、自立の芽を摘んでしまいます。

自立心は積極性があって初めて養われるもの。積極性を育てるには、成功体験を積み重ねることが大切です。その体験の一つ一つが子どもの自信とやる気につながり、困難な局面を迎えたときの力になるのです。

勉強に限らず何か一つの分野で得意なことを一つ持てるとよいでしょう。何かで自信をつけることがやる気につながり伸びていくのです。少しおかげさしにほめてあげるのもよいでしょう。

●自立を促す家庭環境

家庭の雰囲気も「生きる力」を左右する大きな要素です。

家庭が楽しい雰囲気だと子どもの自立も早くなるようです。まずは夫婦が互いに信頼しあい、互いを尊重し合う様子を見せていきたいものです。

また、小・中学生の段階では保護者との豊富な会話やコミュニケーションが知的好奇心をはぐくむ土壌として重要です。

夫婦がいつも何か関心のあることを語り合っている場面に接すれば、内容は理解できなくても子どもなりに何か感じ取るはずで

す。そろそろ恋心も芽生えてくる年ごろ。もしそういう話題が出てきたら、これも成長するためのチャンスです。

相手の立場を考えることを通じて子どもは成長できるはず